

「桜の園」を立ち去った中本信幸先生

堤 正 典

中本信幸先生の新訳によるアントン・チェーホフの『桜の園』の舞台を先日見せていただきました。年表によると、この作品は一九〇四年一月に初演が行われていますが、チェーホフはその前年の八月から九月に戯曲を書いたとあります。ちょうど百年前の作品が、何度目かの日本語への生まれ変わりを果たしたのであります。この芝居の終盤、競売で人手にわたった領地Ⅱ桜の園から主人公達が立ち退く場面で、思い出の詰まった代々の領地を手放さねばならず悲観するラネーフスカヤに対して、桜の園の外での未来に希望をいただくその娘アーニャと万年学生のトロフィーモフの若々しい快活な態度が印象的であります。アーニャは桜の園に愛着を感じながらも最後に「さようなら、古い生活！」と声を弾ませ、トロフィーモフは「こんにちは、新しい生活！」と続けて若い二人は立ち去っていきます。トロフィーモフのこのセリフこそ中本先生の神奈川大学での最終講義のタイトルでありました。

1 中本信幸先生は神奈川大学に一九七七年から二十六年間お勤めになり、二〇〇三年三月に定年でご退職になりました

した。その間に多くの学生のご指導に当たり、ご担当のロシア語は一般外国語としてそれを専門とする学科があるわけではないにもかかわらず、朝日新聞社のロシア語弁論コンクールで優勝者を出したり、多数の学生をロシアへ留学させたりと、卒業後もロシアに関わる人材を何人もお育てになりました。また、中本ゼミはゼミの神大での人氣ゼミナールのひとつでありました。中本先生には、神奈川大学におけるロシア語やゼミナールを担当する教授という他に、ご存じの通り演劇界でも著名なご活躍をなさっております。ある同僚が、中本先生について「先生は本当に若い人が好きだ」と言っつのを聞いたことがあります。その言葉通り「若者への愛」は学生に接する際にも、また、演劇界で若い演劇人の指導に当たられる際にも存分にあらわれています。

「若者への愛」は別に若さへの憧れというわけではありません。先生はまったく若々しいのです。中本先生についてはお世辞でも何でもありません。お気持ちだけではなく、体力的にも相当に若いのであります。私が神奈川大学で一緒に過ごしていたいた八年間でロシアに何度出張なされたでしょうか。ここ数年はおちついたとはいえ、ソ連崩壊後の経済的・社会的混乱のロシアへ、いくら慣れていからと言っても、相当の体力、行動力を要するので、私の記憶では、夏と春の長期の休暇それぞれで最低二往復つはなさっていました。また、授業を休講にして緊急にロシアに出張しなければならなかったことも一度や二度ではなかったように記憶しています。私はその陰で先生について「ちよつと目を離すとすぐロシアに行ってしまう」なんていう冗句を言っていました。失礼をお許し下さい。

長年にわたるその行動力から、演劇界のみならず様々な分野においてロシアとの太い絆でつながっていらつしやいます。ロシアや旧ソ連に対して非常に批判的な一面もお持ちでありながら、やはり、ロシアを愛する気持ちはひ

ときわお強いのであります。

先生は『桜の園』の若い登場人物アーニャとトロフィーモフのように「新しい生活」への希望をいただいて神奈川県を去ることを私たちに表明なさいました。ご退職後、先生はその行動力をいっそう発揮されております。二〇〇三年は、ロシアの古都サンクトペテルブルグが建都三百年を迎え、またロシアでは日本年とされています。日本とロシアの文化交流が盛んになる中で、先生はいくつものお仕事をかかえ、この半年ばかりでロシアへの出張がすでに数回、モスクワ、サンクトペテルブルグ、ウラジオストクなどをそれぞれ訪れ、その後も何往復かなさると伺っています。大学を定年退職した老教授のイメージとはまったくかけ離れた先生の現在であり、まさにますますのご活躍であります。

若さを愛し、ロシアを愛し、神奈川県を愛する中本先生にとって、この大学はいかなる「桜の園」だったのでありましょうか。サクランボも実らなくなり、木々も切りたおされてしまふチェーホフの戯曲の老いた「桜の園」とは異なり、これからも花を咲かせ実をつける大学にしていくことが後を引き継ぐ私たちの役目であります。